

特集

天教中部支部会・亀山での実践発表

～秋の星座と天の川キラキラ探しツアー～

鈴木孝典（四日市市立博物館天文ボランティア／坂下星見の会）

1. はじめに

私は四日市を主な活動拠点として以前から活動していましたが、縁あって亀山の『坂下星見の会』の一員としても活動をしております。そんな折、鈴鹿市文化会館プラネタリウムの田中里佳さんから11月16～17日に天教中部支部会が亀山で開催されることを知り、今回の方針が研究発表だけでなく、実際の星空の下での実践発表も求めていることも知りました。地元で活動している者としては『いつもこの場所でどのように天文について関わっているのか』を見せる必要が有ると感じ、発表者として参加しようと手を挙げました。

正直なところ、キラキラ探しツアーなどというサブタイトルをつけてしまうほどの軽い気持ち（いや、軽いノリと言うべきか）でのエントリーで、『いつも通り』の笑いを交えた星空解説にするつもりでした。が・・・。

もっとも、私の天文知識ではあまり難解なことはできません。私に出来ることは、まずは楽しんでもらうこと、興味の種を蒔き、水を与えること。そのスタンスを崩さず、ちょっと背伸びすれば届く内容で。当然自分自身もちょっと背伸びしないと届かない領域へのチャレンジでもありました。さて、どうなりますことやら・・・。

2. 実践発表の内容はどうしよう？

内容の骨子は、案外簡単に決まりました。

目立つ星の少ない秋の星空で、見て楽しいものという観点で、カシオペヤ座から辿る秋の銀河と二重星団をはじめとする散開星団を題材に、それなりに賑やかな秋の星空を見るためのツアーガイドをやろうと考えました。

この大雑把な構想を、11月上旬の亀山市内や関ヶ原での観望会のときに試してみて、発表の流れ決めたところ、手順は・・・

- 0：まず会場での方角を確認。
- 1：カシオペヤ座を探す。
- 2：二重星団を見つける。
- 3：次は、漢字の『人』の形のペルセウス座を見つける。
- 4：一番明るい星（ミルファク）のまわりが広がった散開星団であることを説明する。
- 5：実はこの二つの星座は天の川の中にあることを説明し、そこから夏の大三角や、ぎょしゃ座を通して冬の星座の方向にもつながっていることを説明する。
- 6：最後に、それらの天体を望遠鏡や双眼鏡で見ってもらう。

と言った形になる予定でした。

が、その後他の方々の実践発表のタイトルを見て、もう少し踏み込んだ内容も必要だと感じ、6に入る前に散開星団が天の川やその周辺に多く存在することや、散開星団の成り立ち（星が生まれて散開星団になるまで）についての説明を加えることにしました。もちろん、ただこちらが一方向的に説明するばかりでなく、お客様側にも星座などを一緒に探してもらうなど、一緒に星空を楽しもう！という『いつも通り』のやり方で行ってみました。

3. さて、本番！！

11月16日（土）は、この中部支部会が開かれた『鈴鹿馬子唄会館』と、隣接する『鈴鹿峠自然の家』にて、10月に台風で中止となってしまった星まつりの代替イベントとして

『リベンジ星まつり』が開かれ、一般のお客様が多数参加された中での発表となりました。

ポインター代わりにLEDライトを片手に、まずは北東の空にある「ジグザグに並んだ5つの星」を探してもらい、そこから二重星団を見つけます。好天にも恵まれ、目の良い人なら肉眼での確認もできる状況の中、なぜこの二重星団が $h\cdot\chi$ と呼ばれるのかをギャグを交え説明（発表後、12 cm F5 屈折望遠鏡で20倍に拡大しお客様に見ていただきました）。さらにペルセウス座の探し方からは、前述の箇条書きの通り進めました。

問題は星が生まれてから散開星団になるまでのプロセスの説明。これは高校地学のレベルで一般の方々には難し目の内容になります。出来るだけ平易な言葉で、散開星団は生まれて約1千万年～10億年程度の若い星の集団であること（ちなみに太陽は約46億歳）、星は銀河の円盤部分のガス雲の中から生まれ、やがて同じ『星のゆりかご』のガスから生まれたたくさんの星たちは、ガスの雲を取り尽くし、あるいは何らかの形でガス雲を吹き飛ばし、星たちはそれぞれに散らばり始めます。その状態にあるのが散開星団であることを解説しました。難しかったかな？と思いつつ、他にも秋から冬の銀河沿いにあるこれらの若い星々をお近くの望遠鏡で楽しんでくださいと、この星空解説を締めくくりました。

4. 忘れちゃいけない反省点

実は大きなミスを一つやらかしていました。

$h\cdot\chi$ の符号をつけたバイエルで作った星座絵図を『ウラノメトリア』と言うところを『フラムスチード星図』と間違えてしまいました。もう少し何を話すかをきちんと整理しておけばよかったと反省しております。

ところで今回のギャグですが、 $h\cdot\chi$ だけに、望遠鏡で見ると「えっ、近い！！」・・・(汗)。

字面にすると面白く見えませんが、こうい

うのは羞恥心を振り払って思い切りよくやるのがポイントです。ウケないことを恐れてはいけません。ちなみに大○浩○先生にはウケたことを報告いたします。

(○西○次先生、ありがとうございます。)

5. おわりに（これからも地に足付けて。）

まず、天教会員ではない私にこの場を提供して頂いた天教の皆様感謝いたします。実際の星空イベントの中で、実際の星空解説を紹介でき、大変満足しております。

このような星空解説は、いつもは鈴鹿峠自然の家のような天の川の見える環境でばかりではなく、近鉄四日市駅前のような街明かりの中での場合や、スクリーンや移動プラネタリウムといった人工の星のときもあります。

それぞれのシーンに合わせ、それぞれに出来ることを踏まえ、見た人に「また星が良く見える場所に行ってみてみたい」、あるいは「宇宙についてちょっと調べてみようかな」と思っていたけりようになれば幸いだと思っております。まだ自分の求める答えは見つかっておりませんが、『みんなが楽しく、自分も楽しそうに。』をモットーに頑張っていきたいと思えます。

文 献

- [1] 天文学宇宙検定委員会編『天文学宇宙検定 2級・公式テキスト』2017～2018年度版 恒星社厚生閣



鈴木 孝典